



文部科学省
IB教育推進コンソーシアム

TEACHER TESTIMONIAL



岡本さちよ氏(香美市立大宮小学校)

香美市立大宮小学校に赴任してからIB教育に携わり、今年で4年目。

昨年度は19名のクラスの6年生担任。教務主任、特別活動の担当、魅力ある学校づくり部会部長を担当。

「こうでなければならないという慣例を変革して、子どもたちの学びも自律的なものに」

IB教育は未知であるからこそ面白い 新しい事を学ぶ喜び

教員暦は20年になり、現在は大宮小で3年目、IBに携わってから同じく3年目になります。特別活動を担当し、学力だけではなく心の豊かさを育む取り組みを推進しております。IB教育に関しては、本校に赴任するまで何も知らず、大宮小が「英語」や「国際バカロレア」というものを取り入れている学校ということだけは聞いておりました。前任の附属小学校では、教師の働きかけによってどのようにして子どもの学びを深めていくかということを研究していました。けれども、大宮小に転任してきて 分からないことだらけで、これまで研究校で培ってきた経験が、IB教育での実践に活かされないような気がしていました。

赴任後に、IB特有の言葉や英語での表現に戸惑いながら、学内で研修(ワークショップ)を受けることになりました。長年経験を積んできて、研究もしてきたにも関わらず、新しい学校で若い先生方を先導するどころか、IBに関しては新任の先生と同様に、分からないという不安や、教えてほしいという思いがありました。ワークショップでは、私にとって未知のことばかりでしたが、だからこそ面白さがあり、新しい発見ができる楽しさもありました。

子どもたちとのIB教育の実践を通して、 自分の中の教育概念に変容が生まれた

当時担当していた4年生たちが第3学年だったころの3学期よりPYPが導入されました。大宮小1年目の私は、PYPカリキュラムのキーワードである「セントラルアイディア(普遍的で汎用的な見方や考え方)」とは何か、という理解から始

まりました。これまで実践してきた授業は、文部科学省指定の教材や指導書等をベースにすることができたので、子どもの姿を想像しながら作ることができましたが、IBを始めるにあたって、そもそもの「セントラルアイディア」という概念自体、説明されても理解が追いついていない状況でした。しかし、研究を進めていくと、セントラルアイディアの理解に向かって学習を進めていくのはとても広範な学びであることに気づかされ、自分がいかに狭い学習事項しか見てこなかったのかということが分かりました。できそうでできないもどかしさの中で、子どもたちと一緒に考え、作り上げていく過程を経て感じたことは、子どもたちはすんなりとその学び方を理解し、探究しているということでした。授業の中で、声を発し、自分で選択し、探究的に学びを進める子どもたちの姿を見ていくうちに、IB教育の良さがじんわりと分かるようになりました。そうしていくうちに、自分自身のIBの理解も深まり、子どもたちと一緒に学ばせてもらっていると実感できたことが、とても印象的であり、楽しくもありました。

IBは国語教育の大村はま先生のおっしゃる、「教えるというよりも、子どもたちに学ばせる」という考えと似ているように思いました。教えるものをもって教室に入り、そこに到達させたいというイメージはありましたが、細かく教えるのではなく、それぞれの子どもが自分で選んだものを学んでいき、子どもと教師がやり取りをしながらサポートしていくというものでした。子どもの学びがよく見えるので、パートナーとしての立場でいることがとても楽しいです。赴任当初は自分の培ってきたものが活かされないのではと思いましたが、IBも子どもとやり取りをしながらそれぞれの学びを紡いでいくのは一緒だと感じました。IBは、これまでと同じだと思うところもあれば、私の教育概念が大きく変わるところもありました。それに気づけたのは、コーディネーターの先生のサ

ポートのおかげです。コーディネーターの先生が新しいことを生み出そうとしている姿には刺激を受けています。私の実践でうまくいかなかったことに対しても、前向きに捉えさせてくれるような声がけや、振り返る機会を与えてくれるような問いかけをしてくれます。コーディネーターの先生のその声がけや問いかけには、私達教員や子どもたちへの思いや希望が込められているように感じました。

子どもたちの学びが自律的に、広い範囲へと変わっていった

I Bのスキル、概念を子どもたちに提案していくと、その時だけの学びで終わらないと痛感した事がありました。例えばあるユニットで自己管理スキルを提案した際、普段は細かく段取りを提案して指導しなければいけなかった子どもたちが、自己管理スキルという言葉を投稿かけるだけで、時間やスケジュールを意識し、その後の全てが自律的に進められるようになっていきました。教科や題材で学ばせていくのではないということを、子どもと一緒に学んだ1年でした。

探究でもそれ以外の授業でも、キーコンセプトを用いて子どもに問いを作らせることを意識するようになりました。そうすると、子どもたちから「これにチャレンジしたい」「次はこれを調べたい」という言葉が自発的に出てきます。子どもとやり取りしながら、セントラルアイディアに向かってくために、子どもの思いや考えに寄り添うようにしています。今では私が問う前に、子どもたちが問いを出すようになり、子どもたちの考えが、どんどん広がって繋げられるようになりました。例えば、ある課題が出てきた時に、子どもたち自身で「前に学習したあれと同じことだ！だったら…」と既習事項と繋げることができ、自分達で学びの方向性を作れるようになりました。このような感覚が子どもたちの中に当たり前のようにしみついているのかもしれません。ルーブリックも自分たちの言葉で作ることによって、主体性が育まれ、自らの学びを振り返りながらゴールにたどり着こうという意識を持って自ら 学び進めています。また、6年生になると、企画力も育ちました。子どもたちにベースとしてやりたい事がもうすでにあるので、自分の意志に任されたと思ったら、どんどん進めていくことができ、とても頼もしいです。私も子どもたちに任せる面白さを感じています。

教室外での学びも、机上の学習より、学習成果が向上していると感じます。現地に行ってみる、実際にやってみるというのが、これまでの経験から子どもに根付いています。6年生だと、エキシビションに向けて個人探究をする時に、自主的に関係者にアポイントメントを取ったり、自分から地域に

出かけて人とつながったり、その方に自ら提案をしたり、何事も臆さず自分を信じてできる子どもたちに育っています。また、最後の卒業制作では、自分たちの6年間の学びを表現するドラマを作る事になり、グループごとに分担しました。地域に出てロケをしたいという子どもたちの思いが強かったのですが、安全確保の面で教員の都合がつかないと伝えると、休みの日に自発的に集まって撮影をするグループも出てきました。もはやタスクではなくなっており、学習というよりは知的な好奇心の発露です。

学習の受容スタイルが多様な子どもたちとこれからの課題

I B教育をしていく中で、深い学びにつながる宿題を出したいという理想があります。ただ現実には、そうもいかないこともあります。求められる学力向上のために、反復学習が必要な場合もあったり、従来の教育方法の方が合っている子どももいたりします。I Bでの課題は、考えることが増えるので、日々の家庭学習の中でもゆとりのある時期、必要である時には子どもたちにとって興味深いものを出したいと思っています。

評価に関してのレポートは、保護者の方も面談では学習の様子などの説明をじっくりと聞いてくださいますが、写真と成果物、短くてわかりやすいものに変えた方が、もっと子どもたちの学びをより理解していただけたとも思います。今後も、レポートだけでなく、動画による成果物を提示するなど、良い方法を模索できればと考えています。

I Bを導入してから「～なければならない」という慣例を変えていったところもあるので、新しく赴任された先生は戸惑う事もあるかもしれません。私は前任校でも、より良い子どもの姿を引き出すにはどうしたらと考え議論するのが好きだったので、I Bでも実践してみたいと思っています。現状では手が回らず少し難しいかもしれませんが、前任校では体育を研究していたので、体育においてもI B教育を実現させることは、これからの自分の課題であると感じています。

I B教育では「生きる力」ではなく「生き抜いてく力」が身につく

I B教育の素晴らしさを一言では伝えきれません。「生きる力」と問われた時にそれは何だろうと思うのですが、I B教育を受けた子どもたちは「生き抜く力」があるように思います。I B教育を受けた子どもは、人生が豊かで、幸せになると思います。私自身も大きく価値観が変わったので、I B教育がもっと広がったらいなと思います。